

黒岩剛仁

成熟ののちの目覚め

昨年十二月号の時評でも、本歌集に触れた。そこでは、三つのパートのうち、それぞれ明快なテーマ設定がなされ、割と少ない歌数の連作で構成されている「Ⅱ」のパートを特に味わい深いとし、「風の組鐘」という連作の七首全てを引くなどした。

本稿では、「Ⅰ」のパートの歌について書く。

- ・ 今日もまた夕陽の色のバスが来て乗らねばならぬ気持ちが出す
- ・ 白昼の表通りはさびれつつバスを降りたるのちの十年
- ・ この世とはあるいは大きな駅ならん最終電車を灯の下に待つ
- ・ 雨の中雨のバス待つたまゆらを心は過去の街角におり
- ・ 窓の下にバス停見えて朝のバス夕陽のバスをわれは見送る

・ 春の闇が糖度増しゆく夕暮れは路面電車で行く過去の町

・ 電車の窓を激しく時間が過ぎて行く十年前の桜咲かせて

まずは、バスや電車、いわゆる公共交通機関が登場する歌である。これらの歌からは、彼の第一歌集『臨界』の「救世主来ざる地上を貫いて高架を轟く朝の電車」を思い出す。「救世主来ざる地上」ともあのように象徴的な世界が詠まれていたのに対して、本歌集の歌では、もう少し身近な世界が詠まれているように思う。バスや電車を待ったり見送ったりしている姿には、作者である谷岡自身の姿が重なる。それゆえ、「十年」は抽象的な時間ではなく、より具体的な時間としての「十年間」なのである。この場合、「十年一日」よりは「十年一昔」なのだろう。人は、十年も経てばそれだけ成熟する（老いる）。本歌集の主題はそこにあるのだ。

- ・ 充ちてゆく月を見上げて来世で逢う約束なども戯れにしつ
- ・ 銀色の闇に梅の香乱れつつ恋という名の

前世失う

・ 稔らざるゆえに輝く薄明の記憶を恋と結びて忘れつ

そして、「十年」を経て失ったものの一つが「恋」と呼ばれるものなのか。いやいや、谷岡重紀という歌人は、まだまだ様々なものに恋しつづき歌い続けてゆくだろう。

それを暗示している「目覚め」の歌を、宗教的な連作「サクリアイス」より引く。

・ 許されるように目覚めて余命約二十年なるわれか 水波む

・ 風渡る大地の隅に初めての目覚めのごとく今朝目覚めたり

・ 私も全く同い年なので、「余命約二十年なるわれ」には、それなりの感慨も湧く。

・ いま持てる幸福の数かぞえつつ光の国から来る人待つ

この一首からも、やはり『臨界』のへうとらの父よ五月の水青き地球に僕は一人いるのにを連想させるが、本歌集の方により「達観」の境地を感じるのには私だけではないだろう。

・ 終わりに、心が洗われた一首を。

・ 街上に地球の自転の速度にて静かに昇る月を嘉する